



今必要な
グローバル教育
とは？

育んでいきたいのは 世界の人と共に生きる力

インターネットで世界とつながるようになった今、グローバル教育の中身にも変化が求められています。海外に行くこと自体に意味があった時代とは違い、現地に行かなくても世界中の人と交流できるようになり、留学や海外研修も今まで通りのやり方では通用なくなっています。今後、学校ではどのような視点に立ってグローバル教育を進めていけばよいのでしょうか。また、保護者はどのようにサポートしていけばよいのでしょうか。海城中学高等学校校長の大迫弘和さんとSAPIX YOZEMI GROUP 国際教育事業本部長の高宮信乃さんのお二人に話し合っていました。

ネットにつながる時代 問い直される グローバル教育の本質

高宮 大迫先生は国際パカローア教育の普及促進に尽力されてきました。日本でのこれまでのグローバル教育についてはどのようにお考えですか。

大迫 まず「グローバル教育」という言葉の意味は、その時代の状況によって変化することを頭に置いておく必要があります。私自身の専門は元来、帰国生教育です。文部省（現在の文部科学省）の文書に初めて「帰国子女」という言葉が登場したのは1960年代です。当時の帰国生教育は「経済・適応教育」として、外国で身につけたものを取り除いて、日本に適應するように教養してあげようという教育でした。しかし、これは間違いだともわかり、代わって出てきたのが「個性伸長教育」です。帰国生たちが持つ特性を伸ばしてあげようというもので、帰国生といっても多様で、英語が得意でない子も物静かな子もいます。そういう子は「帰国生らしくない」と言われてしまいます。結局、その変更は強要される中身が「日本らしさ」から「帰国生らしさ」に変わっただけだったのです。その後、80年代に入ると、帰国生一人ひとりが持つものを大切にしたいという形になりました。個性伸長教育という形ができました。個性伸長教育は教育の本質で、帰国生教育に限ったことではありません。帰国生教育の本質を語っていくと、最後は教育の本質にたどり着くということになります。

が、まさに先生がおっしゃった「経済・適応」時代の帰国生でした。日本語もまともにできなかった私が学校の先生や周りの生徒たちから言われたのは、「ここは日本なんです」という言葉です。頑張ったが、そのように言われたことはあざむいて心に残ったという気持ちには違いない」というひと言で救われました（笑）。

大迫 私が謝ることはありませんが、謝りたい気持ちになります（笑）。
高宮 そうした帰国生教育の変遷がある一方で、今後は日本でも育った子どもたちに対する国際教育が急速に進展していくわけですね。

出発点は英語力 英語が使えれば 世界は格段に広がる

高宮 日本国内でのグローバル教育では、何と言っても、英語を話せるようにすることが土台になると思います。ただ英語が話せればグローバル人材だとは思いますが、英語でコミュニケーションすることによって、できることは格段に増えます。これに加えて海外を経験することで、グローバル人材として形になっていくのではないかと思います。英語さえ話せればよいというのではなく、さまざまな場面で英語を話す経験を積み重ねていくことが重要です。そこには当然、たくさん失敗があります。失敗を積み重ねる経験も必要です。使う英語そのものは「ジャパニーズイングリッシュ」で構わないと思っています。それも個性の一つです。

大迫 私の英語は完全にジャパニーズイングリッシュです。それでコミュニケーションができるという絶対的な自信がありません。

多様な価値観を尊重する 姿勢を養う教育が 世界に通じる力につながる

高宮 アメリカの大学では、日本人といても、ほとんどの生徒がインターナショナルスクールなどから入学しているのが現状です。大学としては多様性のあるバックグラウンドがほしいので、インターナショナルスクール出身の日本人ではなく、日本の一般の高校で学んだ生徒にもっと入ってほしいという考えがあるようです。

大迫 それだけに国内の学校で、海外大学への進学が可能なカリキュラムやプログラムをどこまで作れるかが課題になります。その場合、重要になるのは教育の質の連続性です。海外大学に入ってもドロップアウトしてしまうケースがあるのは、日本の教育と海外の教育の質に連続性がなく、その原因であることが多いと思います。

海城からハーバード大学に進学した生徒がいますが、彼は在校中に、ニューヨークで行われた高校模範国連国際大会で最優秀賞を受賞しています。自分がリーダーになって上国のための役割をしたことが評価されました。国際社会では相互に理解し、尊敬し合うことが非常に重要で、彼はその相互尊敬の大切さを本校での教育を通して学んだのだと思います。海城の教育が世界標準の教育と連続性があることの証明ですから、彼のような卒業生がいるのはうれしいことです。

高宮 海城で導入している「ドラマエデュケーション」も、表現力やコミュニケーション力、リーダーシップなどが身につく、海外をめざすときの大きな力になりますね。インターネットの画面の前にして何でもできる時代に、舞台上立つ人の目にさらされる大きな声を出すことは、貴重な経験になると思います。

大迫 海城では、コミュニケーション能力とコラボレーション能力を備えた人間力を育成するための体験的な教育プログラムを導入しています。その一つが演劇手法を用いた「ドラマエデュケーション」です。ある状況下に自分を置いて、登場

人物の身になって感じたり、考えたりします。例えば、即興劇では誰かが指示を出すのではなく、一人ひとりがその状況の中で即興で動かなくてはなりません。そこに大きな可能性があります。チームでドラマを作る場合は、全員がわかるように助け合いますが、一つのドラマに仕上げたいときは、そこでは価値観の違いを尊重する対話的コミュニケーションが必要で、それを学ぶことこそ、世界に通じる、世界に開かれた教育につながると思います。

高宮 即興劇はとても効果がありますね。その場でどう対処するか、どう考えればいいのか、海外をめざすうえで必要なスキルになってくるでしょう。海外の大学に入るには自分がやりたいことをアピールしなくてはなりませんから、その意味でもそうした授業は必要ですね。

高宮 貴校では模擬国連だけでなく、学術系オリンピックでも多くの生徒が受賞していますね。

大迫 地学、天文学・天体物理学と世界でオリンピック2冠を取った生徒もいます。そうした生徒たちが下級生たちに非常に良い刺激を与えています。

高宮 例えば地学オリンピックに出るくらい地学が好きだったりするようになると、夢中になれる何かがあることは大事ですね。好きなことがあれば、海外に進学する場合も学校選びの一つの判断基準になります。大学にもボーディングスクールにもいろいろな学校があります。背伸びしてトップスクールに入っても、入る段階で燃え尽きてしまつては意味がありません。好きなことに伸び伸びと取り組める学校のほうが、結果的には将来につながると思います。

大迫 東大に「FLY Program」というシステムがあります。入学直後に1年間の特別休学を申請して、ボランティア活動やインターンシップ、留学などを体験するものです。10年間で100人ほどのプログラムの参加し、そのうち1人は海城の卒業生で、すばらしい1年を過ごしたと聞いています。決められた授業などがなくても、自らやりたいことを見つけられる状態が大学に送り出されるのは、重要なことだと思えます。単に海外の大学に入ればよいのではなく、その先どう学んでいけるかというところまで、私たちはきちんと見てあげることが必要だと思います。

一番大切なのは、海外をめざす目的を明確化することです。「何のために海外に行くのか」。その問いに対する答えは「世界の人と一緒に生きるため」です。世界の人と一緒に生きるのだと、そこを明確にしていくことは教育としてとても大事なことです。

高宮 学ぶ目的を明確にするという意味では、日本でも場所も同じだと思えます。その点は、帰国生教育の本質を語っていくと教育の本質に通じる、という先生の最初のお話ともつながります。

大迫 グローバル教育といっても、教育の本質的な部分を忘れてはいけません。ありが

まず自分で気づくこと そして、気づいたときに 相応の環境に在ること

高宮 保護者としてはどのようなサポートを心がけたらよいのでしょうか。いくら親が「英語を話せるようにしたい」「海外に行かせたい」と思っても、子ども自身がそう思わないかぎり難しい気がします。

大迫 本校の英国研修の場合は、希望者が多いのでモチベーションを確認するためのエッセイを書かれています。それでも行きたくないという気持ちがあれば、生徒たちだけで定義を超えてしまうので、抽選になっていきます。親が「あなたが行ってきなさい」というのは絶対にだめですね。

高宮 私にも子どもが3人いますので、ああしろ、こうしろと言いたい親の気持ちはわかります。でも、やはり「こうでなければ」と思って真剣になり過ぎるとよくないようです。それでモヤモヤしてしまうところがありますが、子育てにモヤモヤするのは親として当たり前のことです。

大迫 いずれにしてもあまり期待をかける過ぎず、ちょうど良いくらいの期待をかけてあげてほしいですね。負荷をかけないで成長しないけれど、かけ過ぎるとつぶれてしまいます。その加減がわかるのは親だけです。

高宮 グローバル教育に関しては、英語の必要性や海外体験の重要性に気づくチャンスは早くつくつてあげることがと思います。自分で気づきすぎれば、子どもはどんどん成長していきます。大切なのは、気づいたときにふさわしい教育環境を整えていることです。そう考えると、中学・高校選びでも今までは違った視点が必要になってくるような気がしました。

大迫 気づきを促す教育環境に在ることでも大切で、本校に国内の科学オリンピックで3冠をとった生徒がいます。彼は海外大学への進学を志望していますが、彼のような志望を持つ後輩たちのために既にアメリカの大学に進学している先輩たちが自主的に海外大学進学説明会・相談会を開いてくれています。そこには下の学年も加わるようになって、次代に向けて質の良いつながりが生まれています。生徒が自主的に始めたことは、特に周りへの刺激が大きいですね。

高宮 良い学校とはどんな学校かと考えることができますが、自発的に良いものが生まれる環境がある学校なのかもしれませんね。

大迫 日本国内の大学でも海外で学ぶ制度を持つ大学も増えています。また、高校生のための留学制度も整備されてきています。高校・大学・大学院、チャンスのポイントはたくさんあります。「どこへ行かせなくは」というのではなく、ゆつたりした時間軸の中で考えて、どこかでそういう機会を与えて行かせてあげてほしいですね。

高宮 成長の度合いや興味・関心の持ち方も子どもによって違いますから、わが子に合わせて長い目で将来のことを考えていくのが大切ですね。ありが



海城中学高等学校校長
大迫 弘和 さん
1953年東京都生まれ。東京大学文学部卒。国際パカローア (IB) 教育関連の文部科学省委員、都留文科大学特任教授、千代田インターナショナルスクール東京学園長などを歴任。2023年4月より現職。



SAPIX YOZEMI GROUP
国際教育事業本部長
高宮 信乃 さん
1978年東京都生まれ。1999年ニューヨーク大学卒業後、MBAを取得。2014年にSAPIX YOZEMI GROUP海外進学部門のY-SAPIX Global Campus (YGC) を立ち上げる。3児の母。

